

趙州狗子話と絵画

―祖師図、肖像画、宗達、若冲―

門脇むつみ

はじめに

著名な公案・趙州狗子話（趙州有無、趙州無字、狗子佛性とも。以下、狗子話と略す）にまつわる絵画を考える。本稿で扱う作品は個々には既に紹介や研究、そして狗子話との関わりや指摘もあるが、「狗子話にまつわる絵画」すなわち狗子話図とでもいべき枠組においてそれらを一覽してみたい。それによって日本におけるこの公案の受容、公案の象徴としての犬の扱い、犬図のある系譜、それを支える人的ネットワークなどを新たに認識することができると考えている。先学の成果に学びつつ、祖師図、肖像画、宗達画、若冲画を挙げて、狗子話と絵画の魅力的な関わりを追う。

狗子話^{〔註1〕}は、そもそもは禅宗の史伝『景德伝灯録』（一〇〇四）巻七、『趙州録』（一一三二頃）などに収録される中国唐代の禅僧・趙州從諗（七七八〜八九七）と僧との問答の逸話であり、それが公案として万松行秀著『従容録』（一一二二三）、無門慧開著『無門関』（一二二九）に収録されたものである。『無門関』第一則は次の通り。

趙州和尚、因みに僧問う、「狗子に還つて佛性有や」。州云く、「無」。（或る僧が趙州和尚に向かって、「狗（犬）にも仏性がありますか」と問うた。趙州は「無い」と答えられた。）

『従容録』第十八則において趙州が同じ問いに対して先に「有」と答えているように、趙州の説くところは有無そのものではなく存在を超えた仏性の実態とされる。禅の教えの中枢をいう究極の問答として大切にされ、現在、臨済宗にあつてはまずあたるべき公案の第一とされると聞く。さらに、禅問答の典型、無の思想の象徴として禅門外にも広く膾炙している。

（一）祖師図

狗子話に関わる絵画として最も初発的かつ通常なのは、いわゆる祖師図である。狗子話に限らず、祖師伝あるいは公案という祖師の問答を描く例は珍しくない。たとえば中国には馬公顕（生没年不詳）による「葉山李翱問答図」（南禅寺、一二世紀）、日本では狩野元信（一四七七〜一五五九）による旧大仙院襖「祖師図」（東京国立博物館、一五二三）に石鞏張弓、瀉山踢瓶、徳山托鉢などがある。ただし、そのなかで狗子話の問答を描く祖師図は、この公案の浸透度を思えば意外なほど少ない。管見にはいった主な作品は以下に挙げる通りで、五山僧の語録中の画賛にもあまり例がない。しかし、狩野一溪編纂の画題集『後素集』（二六二三）に「趙州狗子図」として挙げられる通り、当然、祖師図の一角を占めてはいた。同書はその図様を「趙州犬を見、前に僧二人有て問答」と説明し、これが典型的な図様であったようだが、現存作例にもそのことが確認できる。

桃山時代の海北友松（一五三三〜一六一五）には「禅宗祖師・散聖図押絵貼屏風」（静岡県立美術館）中の一図ほか同画題の水墨画が数点知られる^{〔註2〕}。静岡県美本は、妙心寺・鉄山宗鈍（一五三二〜一六一七）

が慶長八年（一六一三）に山名豊国（禪高・一五四八〜一六二六）の求めに応じ賛を書しており、制作年代、制作者などが判明する貴重な作例である（註³）。狗子図の他に「南泉斬猫図」「普化瑤鈴図」などがある。狗子図は画面右側に杖を持って立つ趙州、左に二人の僧、その間に白犬を描く（図1）。賛は「趙州狗子 趙州曰無。崖崩石裂、未拳先知。只得一槩（趙州狗子。趙州曰く無。崖崩れ、石裂くる。未だ拳せざる先に知る。只、一槩を得るのみ）」（註⁴）。この偈に続いて「少室陸禪師」すなわち松源崇嶽の法嗣・瑞巖少室光陸禪師のそれを書写した旨が記される。他図の偈もいずれも宋代の禪僧のそれを写したものであり、それらの偈がまとまって収録される文献も指摘されていることから、中国で詠まれ、日本においても知られていた趙州狗子を詠む偈といえる。賛を請うた豊国は名門の武家であったが戦国期の混乱のなかで因幡岩井城主であったのが城を失い、和歌や連歌など諸文芸に通じていたこともあり一時お伽衆となるも、家康により但馬国に所領を与えられた人物。このような文化的素養のある武家と五山の禪僧との関わりのなかで、公案、祖師の逸話が知られ、こうした作品が求められるに至ったのだろう。

「巖頭渡子図」と二幅対の「禪機図」（伝周文、鹿苑寺）のうち「趙州狗子図」は、画面左奥に椅子に坐す趙州、画面右手前にそれと対面する二人の僧をあらわす。趙州の左脇には白犬が坐り、椅子の下に体がうすい茶色で背中が黒みがかった犬が寝そべる。趙州が立つのではなく坐る点が先の友松作品とは異なるが、その程度の違いはバリエーションとして当然あっただろう。というのも祖師問答図の人物配置はかなり定型化しており、一部を変更しさえすればどの祖師を描く場合にも使えるようなものであったと考えられるからである。たとえば友松の静岡県美本の

図1 海北友松筆、鉄山宗純賛
「禪宗祖師・散聖図押絵貼屏風」のうち「趙州狗子図」
（静岡県立美術館）



「南泉斬猫図」は画面右後方の岩上、やや高くなった場所に南泉が猫と刀をもって坐り、左手前に僧二人が立つ。ここから猫と刀を除き、間に犬をおけば、「趙州狗子図」となる。

近世の臨済僧・仙崖義梵（一七五〇〜一八三七）の作品（愛知県立美術館）は仙崖ならではの軽妙な筆致でいささかユーモラスに描かれたものだが、人物配置や構図は伝統にならう。中央奥に正面向きの趙州と童子、手前右に僧二人、その左に犬二匹を描く。自賛は「狗子佛性、莫道這無。風吹瀝々、東壁葫蘆。（狗子佛性、道うこと莫かれ、這の無と。風吹くこと瀝々、東壁の葫蘆。）。前半で狗子話をいい、後半は『趙州録』の「如何なるか是れ祖師西來の意。師云く、東壁上、葫蘆を掛くること多少時ぞ」を踏まえる。すなわち趙州にまつわる二つの問答を詠む。

また近代の作例として富田溪仙（一八七九〜一九三六）に「南泉斬猫・狗子仏性図」六曲一双屏風（福岡市美術館、一九一八）がある。画面右

の趙州が椅子に坐り、左に立つ僧一人と向き合い、僧をみあげるように白犬がいる。片隻の「南泉斬猫」は南泉と二人の僧がともに立って向き合う。南泉斬猫は趙州の師である南泉普願と僧の問答であり、描かれる場面の後に続く部分に趙州も登場すること、さらに猫と犬が主要モチーフであることから、組み合わせられたものだろう。ちなみに溪仙がこの画題に取り組んだのは、祖父が仙屋と交流があり、自身は建仁寺に参禅するという禅宗に親しい環境に基づくようである^(註5)。

以上みた通り、狗子話を踏まえる祖師図には『後素集』がいうような一定の図様のパターンがあり、継承されてきたことが分かった。また『後素集』に記載はないが、ここでみた作例が全て犬を白犬とすることからすれば、基本的には白犬がしかるべきであつたとみてよいだろう。白こそが趙州の無という答を象徴するにふさわしいと考えられていたためと思われる^(註6)。

(二) 肖像画

さて、この祖師図の定型図様を参照し、自分たちの姿をそれになぞらえてあらわした異色の肖像画がある。桃山時代の大名・黒田長政(二五六八〜一六三三)、大徳寺・春園宗園(一五二九〜一六一一)そして犬をあらわした「春屋宗園・黒田長政像」(図2、福岡市博物館)である。画面右に束帯姿で扇をもつ長政が立ち、左に曲象に坐す春屋、その足下左側に白犬がうづくまる。そもそも二人の人物を描くことが肖像画としては稀であるのに加え犬まで描く本図の図様は、大変目をひく。拙著^(註7)で詳しく考察したので、以下一部繰り返しになるが、この不思議な図様の理由はいくつかの文字資料によりおおよそ推定できる。ま

ず、春屋の慶長十五年(一六一〇)の賛は長政が省悟の契機をつかんだ公案が狗子話であること、これが長政が春屋の参禅した様子を描くことをいう。賛は「吾家話頭、無隠乎尔。要知郝翁、問取狗子。黒田氏長政公於予如支許矣。描咨参之圖而請賛。短偈一絶塞其白者也(吾が家の話頭、隠すことなきのみ。郝翁を知らんと要せば、狗子に問取せよ。黒田氏長政公、予に於いて支許の如し。咨参の圖を描いて賛を請う。短偈一絶もて其の白を塞ぐ者なり)」。郝翁は趙州のこと。また「黒田家譜」長政譜により長政が狗子話によつて省悟し、そのことを記念して描いた図があつたこと、長政が京都の報恩寺で亡くなる際に長政が開基である大徳寺・龍光院よりその図を取り寄せたことが分かる。さらに春屋の法嗣・江月宗玩(一五七四〜一六四三)の語録『欠伸稿』中に春屋の愛玩犬「一佛宗性」が春屋没後の慶長二十年に老衰で死んだことがみえる^(註8)。そこで拙著においては、長政譜にいう図が本図(および拙著でいう同図様の原本)であり、犬が登場するのは長政にとつての狗子話の



図2 画家不詳、春屋宗園賛「春屋宗園・黒田長政像」
(福岡市博物館)

重要性と春屋の愛玩犬の面影を宿すためと理解した。しかし、先にみた狗子話の問答をあらわす祖師図の定型図様を踏まえれば、それら二つの理由に加えて、祖師図に自分たちの姿をはめこんだものとも考えるべきであり、先の私見に補足したい。本図は狗子話による祖師図の図様の定型化と伝播という先の推測を補完し、加えて友松作品にみたような武家の禅への傾倒において公案に関わる絵画が生まれていたことを示す点でも意義深いといえる。

黒田長政という近世初期の大藩の藩主にとって、狗子話がいかに重い意味をもち得たか。長政は死を目前にして本図を掛け「一生只此無の一字に出て、無の一字に終わる」と言って没したとある。また、現在同じ図様の作品が(図2)を含めて三点確認^(註9)でき、それぞれ黒田家(現福岡市博物館本)、龍光院(伝心宗的が春屋の賛を後年書写)、福岡での黒田家菩提寺である崇福寺(土佐光高画、古外宗少着賛、一七〇四)に所蔵されていた、あるいは今もされている。つまり法要などでの利用のために副本的なものが複数つくられたのであり、この図様が長政一人ではなく黒田家にとって大きな意味をもっていたことが分かる。

だからこそ長政の息子・忠之(一六〇二〜五四)は、白犬とともに自らを狩野探幽(一六〇二〜七四)に描かせた(図3、沢庵宗彭賛、福岡市美術館)。制作時期は不明なもの、沢庵の没年である正保二年(一六四五)が制作の一応の下限であり、探幽の様式や着賛の事情などからしておそらくその前数年の間とみたい。束帯姿で坐る忠之の斜め右前に白犬が坐り、一人と一匹は目をみかわす。忠之一人をみれば顔や視線の向きはやや気になるものの、通常の武家の肖像画とあまり変わると



図3 狩野探幽筆、沢庵宗彭賛「黒田忠之像」
(福岡市美術館)

ころはない。それゆえに白犬の登場は奇異にさえみえる。

沢庵による賛は「黒田家譜」忠之譜に確認できるように、沢庵が賛文についての考えを尋ねた際に忠之が「わが遺言かくのごとし」と述べた謡曲『加茂』の一節であり、狗子話を示唆するものではない。しかし、拙著で考証した通り、「春屋宗園・黒田長政像」を本歌として制作されたことは明かであり、この白犬は狗子話そのものの象徴ではないかもしれないが、父・長政と狗子話の関わり象徴ではある。本図に関わる人々は、忠之のみならず、沢庵も探幽も「春屋宗園・黒田長政像」をその制作事情も含めて承知していた。沢庵は春屋の法嗣であり、春屋をついで黒田家の菩提寺・龍光院の住持となった江月とも親しかった。また探幽はその江月を探幽齋号の名付け親としていた。かつて祖師図において問答の内容を象徴するものとしてあらわされてきた白犬を、「春屋宗園・黒田長政像」を仲介としていささか限定付ではあるが狗子話そのものの象徴として描くという実験的な試みは、これ

らの人々の「春屋宗園・黒田長政像」についての理解と共感に根ざしているというべきだろう。しかしそれに加えて、狗子話の象徴として犬のみを描く先例の影響も考えられる。次節にみる宗達の狗子図である。

(三) 俵屋宗達の狗子図

俵屋宗達(生没年不詳、十七世紀前半)および宗達派には水墨の犬図が十数点知られている(註10)。中国には古くから物語絵画や風俗画の添景ではなく犬を単独であらわす作品があり、そのうち南宋院体画が日本に舶載され、日本における犬図のひとつの系譜をなしていく(註11)。しかし、それらはいくまで山水の景のなかに犬をおくもので、春草などを添えていても、ほぼ無背景に犬だけをおく宗達の画面はやはり特殊である。そのような意味で、宗達以前に犬を単独で主題とする絵画はなかったといつてよい。なお、宗達が描く犬はこれまで「犬」とされてきたが、以下に述べる狗子話との関連を踏まえれば厳密には「狗子」と呼ばれるべきであろう(註12)。この狗子図を可能にしたのは、宗達という画家の発想や技術でもあるだろうが、より実際的には彼の作画環境、享受者との密接な結びつきであると思われる。

宗達と親しい関わりがあったと考えられる人物に、公家の烏丸光広(二五七九〜一六三八)がいる。宗達の貴重な伝記資料の一つである「西行物語絵巻」(出光美術館)の奥書を書ることをはじめ、宗達作品に多く賛をなしている。その光広は寛永七年(一六三〇)より一絲文守(二六〇八〜四六)に参禅し七年後に悟し、その記念として「提撕狗子話有悟入(狗子の話を提撕して悟入有り)」と題する「投機偈」を遺し

た(法雲院、法常寺)(註13)。この悟入が光広の人生における大きな転機であったことは、光広の孫・資慶が編んだ光広の歌集『黄葉和歌集』巻末の伝記に特記され、「光広像」(法雲院)の一絲による賛中に偈全体を引いて言及されることに示されている。

宗達および宗達派による十数点以上の犬図のうち賛があるのは二点で、そのうち一点は一絲の着賛(図4、個人)(註14)である。岩と木の芽のようなもの、白に黒の斑のある犬を描き、賛は「被趙老觸、有無相争。叢林戸々、喧惹虚名(趙老の觸を被り、有無、相争う。叢林戸々、虚名を惹きて喧し。)」と狗子話を詠み込む。ちなみに賛の署名「耕雲子」を一絲が名のるのは寛永十年(一六三三)以降である。従って、光広の省悟の時期に重なるが、この作品そのものが光広と直接結びつくかどうかは何ともいえない。しかし、それまでにない単独主題としての犬を宗達を描き、それに一絲が狗子話を踏まえた賛をする、このような作品が生まれる背景に光広の一絲への参禅があった。つまり狗子をもつて狗子話を象徴するという画期的な作品が、宗達周辺におい



図4 俵屋宗達筆、一絲文守賛「狗子図」(個人)

ておそらく初めて実現したと考えるのは的はずれではないだろう。光広は後水尾帝の信任厚く歌や書をはじめ諸芸に通じた当代きっての文人であり、將軍・徳川家光の歌道指南も勤めた、公武双方に文化的影響力をもった人物である。そして、宗達は光広との交友もその一部であるが後水尾帝を中心とする宮廷と関わりがあり、一絲は近衛家出身の祖父をもち後水尾帝周辺の人々と縁戚関係にあり、宮中の人々から深い愛顧をうけていた。

宗達には犬以外にも兎や鹿、牛などの動物を単独であらわす水墨の作品が知られている。兎や鹿の作例は友松に先例があり、また犬の姿かたちや描法には朝鮮絵画との関係が指摘されている。宗達はそうした先例にならいつつ、みずみずしい墨面ややわらかでニュアンスのある線描を駆使して愛らしい姿をあらわした。たとえば大変よく知られた「牛図」(頂妙寺)をはじめ光広の賛のあるものがいくつかあるように(註15)、狗子図を含めそうした動物画の多くは、光広およびその周辺の人々の新しい趣向への賛同、宗達愛好のなかで生まれたのだろう。

狗子話は大変よく知られた公案であり、当時の人々にとって常識的な知識であった。従って、狗子図をみて狗子話を連想するということはその特別なことではなかったと思うが、宗達以前にそのような狗子図がなかった以上、宗達の狗子図は狗子だけが描かれた画面に狗子話を連想するという回路をつくったといえると思う。

既述の「黒田忠之像」の賛者沢庵は、光広そして一絲がともに慕い参禅した僧である。つまり、宗達、光広、一絲のネットワークにおいておそらく寛永年間に生まれた狗子図、狗子をもって狗子話を象徴させるといふ発想は、沢庵を窓口として正保二年より少し以前に制作された「黒

田忠之像」周辺の人々にも知られていたに違いない。「黒田忠之像」の一見珍奇な犬の登場は、「春屋宗園・黒田長政像」における白犬の継承だけでなく、宗達の狗子図における犬の扱いを変形、展開させたものと考えている。

(四) 伊藤若冲の狗子図

宗達がつくりだした回路を巧みに自作に取り込み、さらに別の趣をもつ狗子図をつくりだしたのが、伊藤若冲(一七一六—一八〇〇)である。若冲には仔犬を描く作品が四点知られる。このうち三点に禅僧が記す賛はいずれも狗子話を詠んでおり、若冲の犬図が狗子話と強く結びついていたことが分かる。以下に述べるように、そのことは近年指摘があるが、改めて検討したい。

○ 「彫児戲箒図」

四点のうちもつとも制作時期の早い「彫児戲箒図」(図5、鹿苑寺)は、二〇〇七年に承天閣美術館で開催された展覧会(註16)で新発見として紹



図5 伊藤若冲筆、無染浄善賛「彫児戲箒図」(鹿苑寺)

介された。画面手前に箒を、その背後に仔犬を描く。仔犬は箒を振りかえるような姿勢である。箒の柄が画面右端中央で切れているため、画面の外側に誰かがいて箒で仔犬を掃こうとしているようにもみえる。この犬の姿かたちについては、福士雄也氏が狩野養信筆の模本（東京国立博物館）がある等春画に基づく指摘されている^{〔註17〕}。何らかの原図があったにせよ、比較的自然的な毛描や濃淡を微妙につけた棕櫚の葉には素直に対象を再現しようとする姿勢がうかがえ、画業ごく初期のものとみえておきたい^{〔註18〕}。

「趙州門外小彪兒、来倚寒山苜蓿戲、佛性不須問有無、諸塵三昧從斯起（趙州門外の小彪兒、来たつて寒山の苜蓿に倚つて戯る。佛性、有無を問うことを須いざれ。諸塵も三昧も斯より起ころ。）」^{〔註19〕}と、描かれた仔犬から狗子話を、箒から寒山を想起し、それらに関わる彪兒（むく犬）、苜蓿（くさぼうき）、佛性、有無、塵といった言葉を盛り込む。賛者の丹崖道人は黄檗僧・無染浄善（一六九三〜一七六四）。嵯峨直指庵の覚天元朗の法を嗣ぎ直指庵八代、乙訓の養雲庵住持となった。ちなみに俗兄の仙巖元嵩は萬福寺第十九代住持^{〔註20〕}。若冲画に着賛する禅僧のなかでもその数が最も多いことで知られる。

注目すべきは箒である。これまでみた祖師図でも宗達画でも、狗子とともに箒が描かれることはなかった。仔犬の姿態の参考となった等春画にも箒はない。つまり箒は若冲が独自に加えたものと判断できる。箒を加えたのは、既存の仔犬が何かで遊ぶという図様を参考に、より新しくなおかつ仔犬を愛らしく演出できる図様として考えた結果でもあるだろう。また、今橋理子氏が本文後述の若冲の「仔犬に箒図」（財団法人細見美術財団）について指摘する煩惱の犬を掃くという意味合い^{〔註21〕}も

込められていただろう。しかし、無染の賛は理由がそれだけではないことを示唆する。無染は仔犬が寒山の箒で遊ぶという。描かれた箒に寒山を連想するのは当時においては常識的な教養だろう^{〔註22〕}。しかし、狗子話を象徴する狗子と寒山の箒の組合せは、なかなか含みがある。志南による『天台山國清禪寺三隱集記』（一一八九）に趙州が寒山に会って問答したと載る。唐代の伝説的な散聖である寒山の伝記には不明な点が多く、二人が問答したことも歴史的事実として確認できるものではないが、それは問題ではない。無染が賛に寒山の名を持ちだしているのは、描かれた箒に導かれてではあっても禅僧として二人の問答についての知識があつたのことで理解すべきだろう。

無染は、宗達および宗達派による狗子図で賛のある二点のうちのいま一点「双狗図」（個人）に後賛をしている。「業識并佛性、黑白巧描模、可喚趙州老、任口説有無（業識並びに佛性、黑白、巧みに描き模す。趙州老を喚ぶべし、口に任して有無を説かん）」^{〔註23〕}。つまり、少なくとも彼は宗達の狗子図を知っていた。そこで、そもそも若冲は本図を描くにあたって、宗達の狗子図さらには趙州と寒山の問答について禅僧たちより聞き知っていた、若冲の作画契機がそこにあつた可能性を考えたい。若冲画の制作、享受環境として相国寺・大典（梅莊）顕常をはじめとする禅僧との交流は従来から重視されてきた。ほぼ独学で絵の道にすすんだ若冲にとって、学習の大きな部分を占めていた中国絵画を含む古画の模写のために、それらの所在を教え、閲覧や模写のための便宜をはかる、あるいは絵にまつわるさまざまな知識を示してくれる禅師や禅僧の力は欠かせないものであつただろう。従来、絵を描くことに耽溺していたオタクではなく、町年寄として政治手腕を発揮する社交性や積極性

をもちあわせていた人物という近年の若沖像の見直し^(註23)ののっつていえば、彼はそうして得た知識を自身の作品に盛り込むことにも意欲的だっただろう。「彫児戲箒図」の仔犬と箒という新奇な組み合わせは、若沖と禅僧たちのそうした交友のなかで実現したのではないだろうか。ちなみに大典は一説に近江国神崎郡出身とされ、そうであれば無染と同郷である。実際早く寛保年間(一七四一〜四四)の交流が確認できる^(註24)。「彫児戲箒図」は画業のごく初期の作品であることもあって、二人や周辺の禅僧たちが若沖にもたらす情報がかなり直接的に画面内容に反映された、そういう作品だと考えている。若沖は、禅僧たちに導かれながら、煩惱の犬、等春画系の犬の図様、宗達の狗子図、趙州と寒山の問答といった実にさまざまな知識や情報を取り入れ、新しい狗子図をつくりあげた^(註25)。

○「仔犬に箒図」、「百犬図」

箒のある狗子図⇨趙州と寒山を仔犬と箒で暗示する絵は若沖自身にとって会心の出来だっただろうし、ある程度評判になったのかもしれない。「仔犬に箒図」(財団法人細見美術財団)は、「彫児戲箒図」よりは後の制作とされる作品で、墨画であること、犬が白犬であること、犬が手前で箒が後であることが「彫児戲箒図」と異なるものの、その変形とみなせる。

無染のそれを写したという賛の筆者は、山口真理子氏のご教示^(註26)により龍門承猷(一七三四〜一八〇〇)と判明する。署名「冥鴻猷」、白文方印「承猷」、朱文方印「烟霞第壹」がある。第二句を「束働(？)棕櫚長箒戲」とし「彫児戲箒図」と異なるが、それ以外は同文である。



図6 伊藤若沖「百犬図」(個人)

龍門は大典の弟子で鹿苑寺第七世、同寺の若沖による障壁画は彼の住持就任を記念して依頼されたとみる意見があるように、大典周辺の、若沖に縁ある禅僧である。「彫児戲箒図」はいま鹿苑寺の所蔵であるが、おそらく早くから同寺にあった、少なくとも龍門がみることができるとのであった可能性が高い。すなわち本図の賛者が龍門と判明したことによって、本図と「彫児戲箒図」、そして若沖をめぐる禅僧たちの強い関連が改めて確認できた。

そのような両作品の結びつきは、狗子と箒を組合せて描く絵がごく限られた人々の間でのみ享受されたことを示唆するように思われる。しかし、龍門の賛の語句が一部異なることは、逆にある程度の広がりをもっていた、つまり複数の作品がつくられるなかで、寒山を詠む賛は理解されにくかったため無染が一部語句を変更した詩を別に作した可能性も考えさせる。若沖が似た図柄の絵を繰り返し描くことは、例が多く確認されて

いる通りである。いずれにせよ、この絵には絵解きの役割を果たす無染の賛がセットであることが必須条件であったに違いない。だからこそ、龍門も新たに賛を作らず無染のそれを写したと考えるべきであろう。

若冲およびその周囲が狗子と箒を組み合わせ、趙州と寒山を示唆するアイデアに特別な思い入れをもっていたことは、最晩年の「百犬図」（個人）にもうかがえる。「米斗翁八十六歳画」の署名にいう八十六歳は没年の八十五歳を越えているが、近年の狩野博幸氏による還暦以降改元一歳加算説^{〔註27〕}により実際には八十四歳、最晩年の作とみなせるものである。この作品について以前から気にかかっていたことがある。画面のちやうど中央より少し右で正面を向く白い一匹が緑色の葉のようなもの口にしていること、そしてその右下方で白に黒の斑のある二匹が茶に黒の縞のある一匹をはさみそれら三匹で箒をくわえていることである。本図に仔犬以外に描かれるのはこれら、そして地面に生える草のみである。地面の草は若冲の他の彩色画、たとえば「動植綵絵」（宮内庁三の丸尚蔵館）中の「紫陽花双鶏図」などにも認められ「百犬図」に固有なものではないためひとまずおくとしても、葉のようなものと箒には特別な意味があるように思われてならなかった。そんななか「彫児戯箒図」を一見し、それらは箒の断片であると考えるに至った。つまり、束ねられて箒となっていた棕櫚の一枚と束ねていた縄ではないか。「彫児戯箒図」では縄は黒くより細い紐状のものであるが、既述のように狗子に箒の図が複数あったならば、こうした縄のバリエーションもあったかもしれないし、あるいは縄の断片をより細らしくみせるための表現とも考えられる。

本図について、以前に今橋氏より百狗子図＝百子図であり、犬の安

産、多産とも結び付いた吉祥画という見解がだされている^{〔註28〕}が、それに対して近年、若冲の狗子図が新たにみいだされ狗子話との関係が指摘されるなかで疑問が呈されている^{〔註29〕}。私は多産や安産に結びつく吉祥画という点は動かず、これらの仔犬たちが単なる仔犬ではなく狗子話の狗子でもあるとも考えるが、それよりも若冲と注文主にしか分からないような極めて私的な嗜好がよりさまざまに、強い意味をもって込められているように思う。解体された箒による寒山の示唆はその一つだろう。他にも気になる点は大変多いが、いずれについても具体的な説明はできそうにない。たとえば箒の柄である竹がないのは犬＋竹＝笑ということと関わるのか、上部の吠えかける仔犬たちは何に対して吠えているのかなど。五十八匹の仔犬うち二匹が若冲に関連して制作された「樹花鳥獸図屏風」（静岡県立美術館所蔵）の虎および豹とポーズを同じくすることが指摘されており^{〔註30〕}、全ての仔犬が具体的に意味を帯びるわけでは決していないだろう。しかし、解体された箒としての葉と縄の描写は、これが単なる吉祥画ではないことを示唆しているように思われる。「彫児戯箒図」を描いた画業の最初から「百犬図」の最晩年八十四歳まで、若冲にとつて狗子と箒の組み合わせは執着せずにはいられないものであったとはいえそうである。

○「親犬仔犬図」

若冲が狗子話を踏まえた狗子図に、従来とは異なる工夫を積極的に加味したことをみてきた。近年紹介された「親犬仔犬図」（万寿院）もまた、そうした創意を賛との関わりでみるべきものと考えられる。若冲の印の欠損から晩年の作とされている^{〔註31〕}。画面右を向いて坐る親犬の右前足に

からみつくように仔犬がおり、その仔犬は何かにおびえるように画面左方に視線を向ける。「舐犢勻其愛、吠形能守門、趙州無字話、業識有誰論（舐犢（しとく）、其愛を勻しくす。吠形（はいぎょう）、能く門を守る。趙州無字の話、業識（ごっしき）、誰有ってか論ず。）」犢は小牛、舐犢とは親牛が子牛をなめ愛すること、転じて深く我が子を愛するという謙辞（「後漢書」楊彪伝）。業識は『起信論』に説く五位（五識）の二で根本無明の力によって生じた不覚の心。『從容録』第十八則の狗子話に「僧云、一切衆生皆有佛性、狗子為什麼却無、州云、為伊有業識在」とあり、贊の「業識有誰論」といった言葉はこれを踏まえてものである。すなわち第一句で舐犢という言葉を持ち出し描かれる親子の愛情を、第二句で犬の優れた点を述べ、それを承けて後半で狗子話に及んでいる。贊者は聞中淨復（一七三九〜一八二九）。はじめ相国寺・大典に学び、後に黄檗僧となった。若冲に絵を学び、詩文、書画を能くした。若冲画への着賛も多い（註32）。

親仔の犬を描くことは、『宣和画譜』巻十八、易元吉の項に「子母犬図」とあり、現存作品では毛益に伝称される「蜀葵遊猫図・萱草遊狗図」（大和文華館）およびそれに類する南宋院体画にみられるところである。日本においては犬の姿かたちは伝毛益画において犬とセットで描かれていた麝香猫の姿かたちに転用されて、狩野派の作品などに取り込まれていった（註33）。従って、麝香猫の親仔は盛んに描かれたが、犬の親子の絵はあまりない。ところが十八世紀後半になると確かに確認できる。若冲がまさに京で活躍していたころ、円山応挙（一七三三〜九五）とその弟子・長沢芦雪（一七五四〜九九）および円山派の画家が盛んに狗子図を制作する。応挙には管見の限り親仔犬はないようだが明和年間

（二七六四〜七二）以降多くの仔犬図が確認され、芦雪には数例の親仔犬図が知られる。芦雪には襖三面にわたって成犬三匹と仔犬十匹を描く「花鳥群狗図」襖（成就寺、一七八六年）や「犬図」六曲一隻屏風（個人、天明年間）がある。また京狩野家六代めの永良（一七四一〜七二）「親仔犬図」（静岡県立美術館）は、黒犬と白犬の二匹の親犬と五匹の仔犬を無背景の画面にあらわす。基本的には狩野派伝統の濃彩細密の描法であるが南蘋派の影響が生々しさがある。だが、図像的には円山派に近い。流派の違いを超えて、同時代の京でこのように親仔犬図が複数みられる背景には、当時のペットブームなど社会事情にも目を向けるべきかもしれない（註34）。

若冲は当然、このような同時代の同じ街の動向を知っていただろう。その上で、新しい親仔犬図として試みられたのが「親仔犬図」であり、その新しさは「舐犢」という言葉を鍵としているのではと考える。本図の親犬の口元からのぞく舌は、上下の顎との位置的整合性にやや欠け唐突な印象である。また、仔犬を舐めているわけでもなく、なぜ舌を描いたのが不可解でもある。本図の親犬と仔犬の姿かたちは円山派や芦雪のそれとおおよそ共通しており、当時の市井の画家が利用できた粉本的なものによると考えられる。しかし、それらにおいても舌を出すものはない。そこで先の「彪兎戲箒図」についての私案を敷衍すれば、若冲は「舐犢」という言葉にヒントを得て新しい犬図を生み出すことを画策したように思われる。しかし本図において若冲らしい動物へのまなざし、一ひねりある表現として目をひくのは何かにおびえるかのような仔犬であり、その点で「舐犢」という趣向の取り込みはあまり成功しなかったといえるだろう。

賛の内容、賛者と若沖の関わりに重きを置きすぎた解釈かもしれない。しかし、かつて佐藤康宏氏は「画家自身が禅的な読み込みをどれだけ予想していたかは分からない」ものの「動植物を仏法の比喻と見なすのを喜ぶ環境に、画家が親しく身を置いて行われた事実も軽視すべきではない」、またこうした「環境が逆に若沖の造型に力を与えた可能性もあるう」と述べられた^(註35)。その見解に賛同し、本稿では一連の狗子図を若沖画のなかでも特に禅的思想、禅僧との関わりのなかで解釈することが妥当かつ有意義と考え検討した。

むすび

宗達、若沖以外に本稿で挙げた作品―応挙、芦雪、永良画などに狗子話との関わりを積極的にみるべきかといえ、否であろう。彼ら画家もその享受者も狗子話を知らないわけでないだろうし、芦雪画については今橋氏の、繰り返し描かれる後ろを向く黒犬に黒十犬^(註36)黙^(註36)無の意味がこめられていたという意見^(註36)に魅力を感じる。しかし、そうであっても享受者がより強く求め、画家が努めて描き出そうとしたのは、狗子話の象徴としての狗子ではなく、みれば思わず笑みがこぼれるような、ひたすらに愛らしい狗子であったはずである。

犬に関わる画事として見過ごせないものに、曲亭馬琴（一七六七―一八四八）畢生の大作『南総里見八犬伝』（一八一四―四二）がある。八犬士らが描かれる本文中の挿図もさりながら、全九十八巻百六冊の表紙、見返しの犬にまつわる古今の故事を踏まえたモチーフや玩具などをあしらいが興味深い。たとえば「犬は雪の姨」という当時の俚諺を踏まえ雪輪あるいは雪と仔犬を組み合わせる意匠が多く、また仔犬が寄り集

まって百犬図的な趣を呈すものもある。しかし、そこに狗子話は取り込まれなかったようだ。

馬琴は天保三年（一八三二）九月十六日付の小津桂窓宛の書簡において、以前に二人の間で話題になった「狗子仏性」に触れ、その出処、禅録の内容を挙げた上で次のように述べる。「この無の字は有無の無にあらず。（中略）無中の有也。敲ざればその有を発せず。故に趙州ハ無トいへるよし也。此趣二候へバ、『八犬伝』の表紙などニハ、用ひがたき事ニ御座候。御一笑。」^(註37)

馬琴は狗子話の無の意味を的確にとらえている。そしてだからこそ、狗子話を表紙の意匠に生かすことはあり得ないと考えている。博識で犬好きの馬琴のこの様子を見ると、狗子話が一般に膾炙していたとはいえず、それにまつわる絵画の制作および受容は知識の有無ではなく、やはりある程度、禅的思想に親しい環境あつてこそと知られる。

狗子を単独で狗子話の象徴として描く、あるいはその意味あいでお像画に描き入れる、また狗子と箒を組み合わせるといった絵画は、本稿で挙げた他にはそうないだろう。近世の日本で、特定の人々の交友において共有された知識や嗜好を土壌にイメージと情報が連鎖し、優れた画家を得て新しい図様、内容で画面に定着していったものである。それら新しい画面をつくりだした探幽、宗達、若沖は、近世絵画史のなかでも際立った力量をもってそれぞれに画境を開いた画家たちである。狗子話にまつわる絵画は、彼らのその才能をつくづく感じさせるとともに、その才能が彼ら一人の力ではなく、新しい作品を可能にする制作環境、それを求める受容者たちとの関わりのなかにこそあつたことも改めて認識させる。

註

- 1… 狗子話については平野宗浄「狗子無仏性の話をめぐって」(『禅学研究』六二 一九八三年)、西村恵信・訳注「無門関」(岩波文庫、一九九四年)、『禅学大辞典』(大修館書店、一九八五年)により、本文後述の引用は西村氏著書によった。
- 2… 長岡由美子「海北友松作品一覧」(『展覧会図録』近江の巨匠 海北友松)〔大津市歴史博物館、一九九七年〕によれば、十面の襖貼付の一図(正智院)、沢庵賛の掛幅(個人)がある。
- 3… 河合正朝「禅宗祖師図」『國華』九九〇 一九七六年。
- 4… 以下、本稿で取り上げる画賛の翻刻、読解については芳澤勝弘氏より懇切なご教示を受けた。記して心より御礼申し上げる。
- 5… 『日本美術院百年史』四(日本美術院百年史編集委員会、一九九四年) 九一四〜九一六頁。
- 6… 谷口研語氏(『犬の日本史』PHP親書 二〇〇〇年。特に第二章白い犬の幻想)がいう、白犬が古代から日本人に好まれ霊獣あるいは妖獣として位置づけられてきたことなど、白犬をある種特別視する伝統が関わってもあるだろう。以下、犬については主に同書、斎藤弘吉『日本の犬と狼』(雪華社、一九六四年)、大木卓『犬のフォークロア』神話・伝説・昔話の犬(誠文堂新光社、一九八七年)を参照した。
- 7… 拙著「寛永文化の肖像画」(勉誠出版、二〇〇二年) 七七〜九一頁。
- 8… この「一佛宗性」という名も狗子話を踏まえているが、同話に基づいて犬の名前がつけられた他の例に、足利義満の愛犬二匹の名を彼と親しい禅僧・義堂周信が「有性」、「無性」としたことがある(註6) 谷口文猷六四頁)。無の象徴が白犬であったことからすれば「無性」は白犬、「有性」は黒犬だろう。また犬の死を悼む偈に仏性、有無といった言葉をいれることも五山詩に先例がある。
- 9… 拙著の時点では二点を知るのみであったが、その後、土佐光高画(作品9『展覧会図録』近世やまと絵展 福岡市美術館、二〇〇二年)を確認した。なお、同本は崇福寺目録によって龍光院本の模本と分かる。
- 10… 山根有三「水墨美術大系 第十巻 光悦・宗達・光琳」(講談社、一九七五年)、(『展覧会図録』日本の美 琳派展)(NHKプロモーション、二〇〇四年)などによる。
- 11… 伊藤大輔「与謝蕪村筆狗子図」『國華』一二〇三(一九九六年)、板倉聖哲「伝毛益筆蜀葵遊猫図・萱草遊狗図をめぐる諸問題」『大和文華』一〇〇(一九九八年)。
- 12… 宗達の犬図と狗子話との関係を最初に指摘したのは管見の限り、河野元昭氏(解説「犬図 依屋宗達」『秘蔵日本美術大観6 ギメ美術館』講談社、一九九四年)である。その後、今橋理子氏(『江戸の動物画 近世美術と文化の考古学』東京大学出版会、二〇〇四年、三一〜三三頁)が狗子話に基づく作品として本図を取り上げている。なお、(註8)で述べた飼犬に狗子話を思う禅僧および周辺の人々の眼差しは、単独で描く犬を狗子話の象徴ととらえる宗達周辺のそれと極めて近い。管見では知らないが、中近世の禅僧の余技的な墨画において狗子話の象徴として犬を単独で描くことがなされていた可能性もあるのではないか。
- 13… 光広について特に下記によった。小松茂美「鳥丸光広」(小学館、一九八二年)。「投機偈」については作品解説一八八、一八九および本文。また一絲については主に次による。『仏頂国師語録』(『国訳禅宗叢書』第二輯第一〇巻所収、国訳禅宗叢書刊行会編、第一書房、一九七四年)、「一絲文守禅師特集」『禅文化』一〇一号(禅文化研究所、一九八一年)、『展覧会図録』沢庵と一絲 永青文庫展8(熊本県立美術館、一九七九年)。
- 14… 中村溪男「依屋宗達筆 一糸文守賛 狗子図(名品鑑賞)」『古美術』五一、一九七六年。
- 15… 兔図について鈴木健一氏の考証がある。「鳥丸光広の兔図賛」『江戸詩歌の空間』森和社、一九九八年。
- 16… 『展覧会図録』若冲展 釈迦三尊像と動植綵絵12年ぶりの再会 相国寺承天閣美術館・日本経済新聞社、二〇〇七年。
- 17… 福士雄也「若冲と朝鮮絵画」『アジア遊学』二二〇 朝鮮王朝の絵画 東アジアの視点から 勉誠出版、二〇〇九年。
- 18… (註16) 図録・作品16解説において村田隆志氏が「画業の初期」とされ、それを承けて福士雄也氏も作品311解説で同様の見解を示す(『展覧会図録』

- 朝鮮王朝の絵画と日本―宗達、大雅、若冲も学んだ隣国の美』読売新聞大
版本社、二〇〇八年。
- 19…(註16) 図録・解説にて村田氏が翻刻、狗子話との関連を指摘し読解をされ
ているが、本文の通り、私家はそのとは異なる。
- 20…大槻幹郎『黄檗文化人名辞典』(思文閣出版、一九八八年)による。
- 21…(註12) 今橋文献三三四～三三五頁。
- 22…寒山は経巻あるいは筆を持ち、拾得は箒を持つか天を指すとして二人の別
をなすことが多い(たとえば『展覧会図録』寒山拾得―描かれた風狂の祖
師たち』栃木県立博物館 一九九四年)。しかし、『慶長見聞集』巻九「聲、
佛事をなす事」に「然るに寒山と云し人は、常に手にはききをつけて、五
ちん六よくの塵埃をはらへり」とあるように、寒山と箒を結びつける場合
もある。そもそも海老根聰郎氏がいわれる通り「両者はしばしばまじりあ
い、区別のつかぬ場合が多く、またそれをきめることもそれほど意味のあ
ることではあるまい」(作品二解説『元代道釈人物』東京国立博物館、
一九七八年)。本賛において箒を寒山に結びつけるのが過った知識や勘違い
ではないことを念のため断っておきたい。
- 23…奥平俊六「鶏図 伊藤若冲筆」解説『新修茨木市史 第九巻 史料編
美術工芸』(茨木市史編さん委員会、二〇〇八年)、およびそれを承けて積
極性ある若冲像を具体的に描き出した狩野博幸「若冲の歌を聴け」(『展覧
会図録』若冲ワンダーランド』(MIHO MUSEUM、二〇〇九年)による。
- 24…(註20) 文献。
- 25…既述のように狗子話に関わる犬は基本的に白であることを思えば、「厖
児戲箒図」が茶地に黒斑とするのは、等春画系の原因にならったためのよ
うだが、いささか疑問ではある。
- 26…山口氏には記して心より感謝申し上げる。なお、このご教示に基づき「仔
犬に箒図」についての私見を一部改め本稿に反映した。
- 27…狩野博幸「伊藤若冲について」(『展覧会図録』没後二〇〇年 若冲(京都
国立博物館、二〇〇〇年)、『伊藤若冲大全』(小学館、二〇〇二年)に再録。
- 28…今橋理子「狗づくし」『日本の美学』三二 燈影社、二〇〇一年、(註12)
今橋文献三一五～三一九頁。
- 29…富士雄也(註18) 作品307解説『展覧会図録 朝鮮王朝の絵画と日本―宗達、
大雅、若冲も学んだ隣国の美』。
- 30…藤井菜都美「鳥獸花木図屏風」の作者をめぐる―「樹花鳥獸図屏風」と
の比較を中心に『哲学会誌』三三三 二〇〇九年。なお、(註18) 図録にい
うように若冲は仔犬の描き方、ポーズなどを朝鮮絵画に学んでいるとみな
せるが、特に群れ集まる仔犬というアイデア、図像については、たとえば
伝毛益だが朝鮮絵画とみなせる「狗子図」(ランゲン・コレクション)のよ
うな作品を考えるべきだろう。
- 31…狩野博幸・作品86解説(註26) 文献。
- 32…(註20) 文献による。
- 33…(註11) 伊藤文献、板倉文献。
- 34…たとえば18世紀後半に狎の飼育がブームとなっている。狎は犬と猫の中間
的存在とみなされ、小型犬を総称してそう呼ぶもので、心拳や若冲画に
描かれるそれも狎的なものなのかもしれない。あるいは上方で狂犬病が流
行する(註6) 文献。また宗達が活躍した寛永期には「べか犬」と呼
ばれる小型犬が「童部共愛する為に飼置」として犬一般とは区別されてい
たという(塚本学「江戸時代人と動物」日本エディタースクール出版部、
一九九五年、二二五頁)。宗達の狗子図について、その点を含め宮中におけ
る愛玩犬のありようの検討も今後必要と思われる。
- 35…佐藤康宏「事物と幻想―若冲を中心に」『日本の美学』一七、ペリカン社、
一九九一年。
- 36…(註12) 今橋文献三二四～三二五頁。
- 37…柴田光彦、神田正行編『馬琴書翰集成』第二巻(八木書店、二〇〇二年)
一九六頁。
- 図1は(註2) 図録、図2・図3は(註7) 文献、図4は(註14) 文献、図5は(註
16) 図録、図6は(註26) 文献より複写した。

(かどわき むつみ・本学国際人文学部国際文化学科助教)

